郷土資料

昭和五十年四月二十九日

第六十八回史跡めぐり資料（白岡町）

越谷市郷土研究会
理事　山崎善司

案内

一、日時　四月二十九日

一、集合　越谷福祉会館前　集合
午前九時　バス出発

一、場所　南埼玉郡　白岡町

一、コース　バス　福祉会館前　九時出発―
辻谷―興禅寺―昼食―
栢間城―江ヶ崎

一、会費　金五〇〇円也
昼食持参のこと

○　辻谷のお虎子石

○　城の丸城

○　白岡の八幡宮　駒つなぎ杉

○　興禅寺の板碑

○　栢間の天王塚古墳　神明社

○　江ヶ崎城跡　鰐口及板碑

○　黒浜・館跡の土壘跡

白岡めぐり

昨年　越谷市郷土研究会　第六十三回史跡めぐりには騎西町周辺の野与党関係と思はれる寺院や館跡　板碑など「道智」「多賀谷」「多名」氏などの拠点を見て廻りましたが、その時に　鎌倉室町時代に生活し　又活躍した人々の足跡と残影を　私達は知ろうとした訳です。

今回は前記の「道智」「多賀谷」「多名」氏等の人々の一族で　騎西より南にあたる白岡一帯をその拠点とした「栢間」「大蔵」「野与」「鬼窪」「白岡」「江ヶ崎」「黒浜」氏などの生活したと思はれる所を見学したいと思います。

白岡周辺は野与党一族の内、最も早い時期に入植した地と思はれるのです。何故ならば野与党の祖と云はれる武蔵四郎胤宗、野与庄司の野与六郎基永、大蔵九郎大夫經長等々、野与党系図の上から地名を冠した人々の名を見る事が出来るからです。菖蒲町の三箇村には小字名で大蔵　篠津村野牛（やぎう）には野与の「家」とか野与の「道」とかの地名などが伝承していることからも観見する事が出来ます。

白岡周辺に居住したと推定できる各氏は「野与系図によると、大蔵、栢間、野与　南鬼窪　鬼窪　黒浜　白岡　江ヶ崎などの各氏です。

さてこれらの人々の居住した拠点はいったいどこにあったのだろうか？　此れが私達の一番知りたい事ではないでしょうか。

まず大体わかる処から述べてみようと思います

◎　江ヶ崎氏の居館は、江ヶ崎の石川氏宅の周辺で、宅地造成の為にその原形は現在ありませんが「方形」の二重の堀と土塁がありました。

◎　黒浜氏の拠点は黒浜療養所の近くで、その土塁の一部があったとされています。

◎　白岡氏の拠点は、白岡町字城（じょう）の丸城と云はれる処がそうであろう。

◎　鬼窪氏の拠点は、篠津の興禅寺の処がそうであろうとされています。

◎ 栢間氏の拠点は 栢間字沼尻にあった城跡がその館跡ではないかとしています。

◎ 野子氏の拠点は、中世の早い時期に勢力の中心が鬼塚氏に移動した為か、館跡の根跡はありませんが 野子の「家」 野子の「道」などと野子の名を冠した地名や呼名が伝承されていますので現在の野牛の地がそれと解ります

◎ 大蔵氏の拠点は 菖蒲町字三箇あたりと思はれ 上大崎には 大蔵龍権現社と云う社殿が祀ってあります。

つぎに篠津の興禅寺の西側にある白岡の八幡様は 鬼塚八幡宮と古称され、八幡太郎義家の「駒つなぎの杉」なる巨大な杉の枯根がいまも所在している 境内社に「馬のわらじ」を奉納する神馬社があるなど 何か古式ゆかしい社であります。江ヶ崎氏の館近くには江ヶ崎沙弥行蓮の正和三年(一三一四)の鰐口や、元亨三年(一三二三)平頼景の板碑が発見されています。江ヶ崎氏館跡は団地が造成される以前迄は、回形の縄張遺構が比較的良く残って居り 今は変化してしまい誠に残念です。栢間の沼尻の神明社は箭弼の神事をのこす社であり、近くには天王塚と云う 前方後円墳としては南埼玉随一の古墳があります。沼尻には栢間城跡が有り、今は遺構を止めていませんが壹岡氏の館跡と云はれています。

此の様に白岡町周辺を見てまいりますと、中世の人々の息吹が感じられますが この一族が何故騎西郡の地に播居し、平安末期より室町中期迄 このように繁栄し そして消えていったかを考えなくてはなりません。

先ず第一に野子党と云はれる一族の入居地域を見まするに 北は騎西町の北端 道地、内、外多ヶ谷より菖蒲、栢間 三箇 篠津 野牛 白岡 黒浜 寳ヶ谷 江ヶ崎 笑輪 金重 洗 江(大崎) 加倉 村国 横根 須久毛 野島 越ヶ谷 大相模 別府 柿ノ木 青柳 八條 大曽根 小作田 等々元荒川の西側より綾瀬川の東側の南北に細長い地形の地域に全面的に入居しています。野子党系図によりますと これらの地名を冠した氏姓を見ることが出来ます。

又（永正年間）の越谷市大松の清淨院に伝わる栄広山由緒著聞の中に出てくる姓名も　此の地名を冠した姓名を見ます。このように見てまいりますとお解りの事と存じますが　北埼玉郡の元荒川の南西方より南埼玉郡と云はれる地域と云うことになります。そして此の地域の氏姓と同一地名の有る処には必ず久伊豆神社　八幡神社が観請されています。（この神社に関する研究は後日皆様にお願い致すこととして本日は省略致します）

では此の野多党一派は何時頃より入居したのだろうか、と云う疑問が出てきます。それは天慶（九三九）の乱の後の政治的変革により勢力圏の変化にもとずくものと思われます。即ち其の頃武蔵国には郡司に武芝　その後任に興世王　その後任に百済（くだら）貞連が任ぜられたが　これを不服として興世王と貞連との間に争が生じ、この争いに高望王の二子良將の子　平将門は興世王に味方して起きた乱が、「天慶の乱」であります。天慶（九四〇）三年二月十四日　藤原秀郷　平貞盛らの奮戦により、茨城県岩井町に於て平将門は討死　其の類族はことごとく討伐されて此の乱は終ったが、この乱の時、前司武芝も将門に味方した為　其の後足立郡司を退き、氷川神社の祭祀からも身を引いています。

此の乱の後功績のあった藤原秀郷は武蔵の国守に任ぜられました。又高望王の長子国香は将門に承平五年（九三五）二月　殺されたが、その子貞盛は　功により鎮守府将軍に任ぜられました。将門一門及び此れに共した一族の所領収されて　此の一族に恩賞として受領したものと思われます。高望王の五子村岡五郎良文の子忠頼は陸奥守、上総守、下総守、常陸守を兼任する事になり　その実力は強大なものになりました。

忠頼の子忠常（村岡五郎良文の孫）は上総介に任じ、武蔵押領使となり、騎西郡一帯に名実共に入植するようになるのですが、此の時代には忠常自身は官職としてであって　事実上の生活の場では　今だ無い様です。

忠常の弟も又武蔵守を受領し　治安三年（一〇二三）の豊島の戦に勝利し大いに武威を揚げています。

長元三年（一〇三〇）　此の平忠常の乱に源頼信は忠常追討使として　急拠武蔵に出陣隅田川を挟んで激戦しています。この時源頼朝の説得により忠常

は頼信に心服し「忠常に謀叛の心なし」として朝廷に申し開きをする為、頼信は忠常を伴って京へ上る途中病死しています。時に長元四年五月十五日の事です。

忠常の子常将の代になり　騎西郡に四子胤宗は武蔵四郎を従えて入植、この胤宗が野手党の祖といわれています。子太郎元宗　孫基永は野手六郎を従え、野手庄司となりました。

又常将の孫に当る　常長の子は十子有る中で、皆それぞれ上総　下総　常陸　武蔵の国各地に入植し　其の地の地名を氏姓として栄え、その氏姓の祖となり、子孫大いに繁栄しています。鴨根　栗飯原　原　相馬　安西　周防　大須賀より分れて野手庄司道永　そして大蔵次郎恒宗がいます。大蔵守がそれであります。

此処で野手党系図並に千葉大系図を併せて見るに、騎西郡の地図上の全面的各地に　数代にわたり入植し、分岐して居住し　各郷の郷司的長として繁栄した事がわかるのですが、野手党系図と千葉大系図の中に多少の相違を見出す事ができます。いずれが正しいかは　諸兄の研究を待つとして、次に図示して見ますと、

以上より見ますと、千葉大系図より見ると宗家の千葉氏よりの　親子養子関係を、分脈を追って書いたものと思われますが

野手党系図より見ますと、後年作成した為かわかりませんが初期入植者の氏名は、当時の棟領的支配者の氏名が祖となり　惣領家の移動があったのではないでしょうか。野手党系図の初期には必ずしも親子兄弟の継りの系図では理解が困難のようであります。

七・八代後、箕勾氏の頃に惣領家と記されている処から推察する事が出来ます。野手—鬼窪—箕勾—渋江

野手党系図を見るに、平忠頼の四子胤宗が野手党の祖と云われ　子太郎元宗　孫基永　は野手六郎と称し、野手庄司となりました。子行基は小太郎を称したが、庄司は、千葉氏二代常長の子　八郎大夫常継の子　近永にゆずるか？　近永野手庄司を称しています。　其の子恒宗は大蔵二郎を称しています。小太郎行基は、多名　鬼窪　菅間氏に別れ、庄司基永は野手　道智　大蔵に別れ、道智は多賀谷、大蔵は渋江　高柳　箕勾に各分岐し、大蔵は南鬼窪　黒浜　白岡　江ヶ崎　又箕勾は　古志賀谷　栢崎　神倉　大相模（大畑）　須久毛　横根に分脈し　又渋江　八條　金重　野崎（野島か）各々に分脈して蹄西郡のほゞ全域に分岐居住して各郷の長として確固たる地歩をしめて繁栄したのであります。

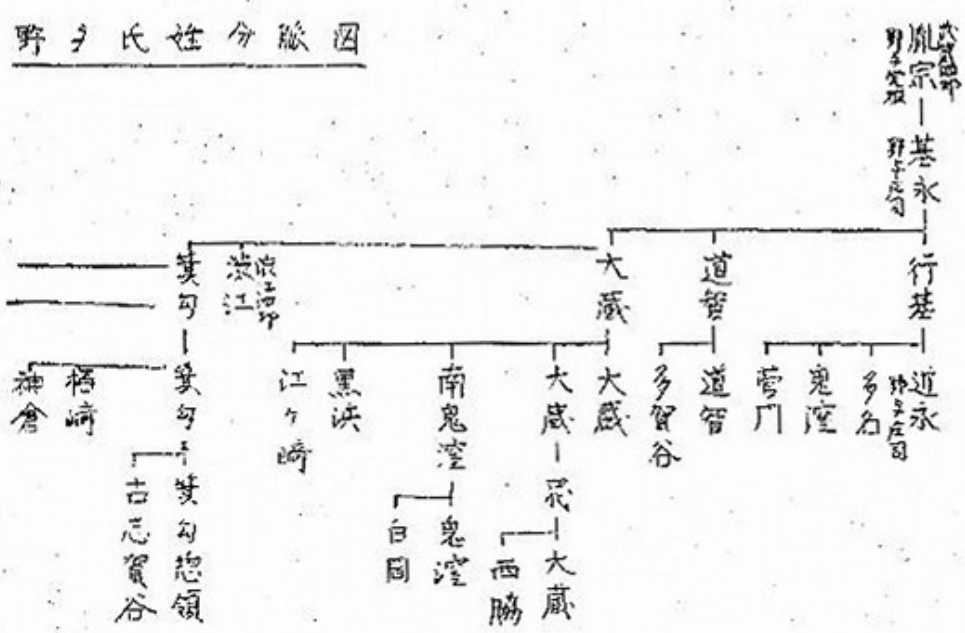


図　脈分　姓氏　野手

長元元年（一〇二八）　平忠常　常陸に於て叛す、源頼信之を降す。

永承六年（一〇五一）　安部頼時　奥州に於て叛す、源頼義之を討つ、前九年の役始まる。

康平五年（一〇六二）　安部貞任、宗任兄弟を源頼義、義家親子之を降す、前九年の役終り　奥州平定す。

永保三年（一〇八三）　清原家衡、出羽乱る、源義家之を討つ　後三年の役始る。

寛治元年（一〇八七）　清原武衡、源義家之を降す。後三年の役終り　出羽平定す。

保元元年（一一五六）　保元の乱　源為義討たれる。

平治元年（一一五九）　平治の乱　源義朝討たれる。

永延元年（一一六〇）　源頼朝　伊豆へ流される。

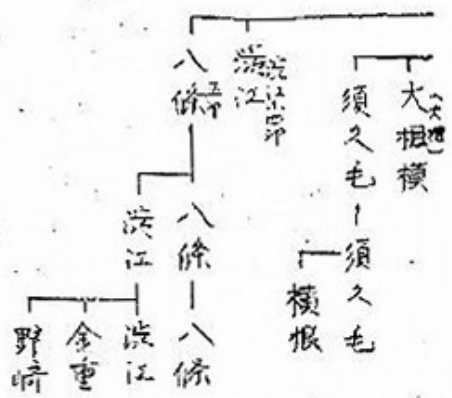
仁安二年（一一六七）　平清盛　太政大臣となる、平家全盛を極む。

治承四年（一一八〇）　源頼朝　伊豆に兵を挙ぐ。

元暦元年（一一八四）　木曽義仲　信濃に兵を挙ぐ。

文治元年（一一八五）　源範頼、義経等　木曽義仲を宇治に破る、更に平家を一の谷に敗る。

源平　壇の浦に戦い、平家滅亡　安徳帝入水す、頼朝全国に守護地頭を置く。



忠常の代より　文明の頃迄の厂史的事件を上の如く列記し諸兄の参考に供します。

建久二年　頼朝　鎌倉に政所、問注所を置く。
建久三年　頼朝　征夷大将軍となる。
建久四年　曽我兄弟の仇討
正治元年　頼朝　薨ず　頼家将軍となる。
建仁三年　頼家　伊豆に幽せられ、実朝将軍となり、北條時政　執権となる。
建保元年　和田義盛の乱　和田一族亡ぶ
承久元年　鶴岡宮別当公暁、将軍実朝を殺す、源氏断絶す、藤原頼経　将軍となる。
承久三年　承久の乱　後鳥羽上皇　隠岐に流さる。
六波羅探題設置
貞永元年　御成敗式目制定　五十一ヵ條
宝治元年　三浦氏の乱　三浦氏　春日部氏　難に逢う。
文永五年　蒙古の使者　国書をもたらす。
文永十一年　三万余の蒙古軍壱岐、対島を寇し、九州に来襲す。
弘安四年　元軍再度来襲
正中元年　正中の変、北條高時　専横　極に達す。
元弘元年　元弘の変。
元弘二年　後醍醐天皇隠岐に配流
元弘三年　新田義貞挙兵、高時を誅す、鎌倉幕府滅亡　天皇還幸す。
建武元年　建武中興　天皇親政
建武二年　足利尊氏　鎌倉に処て叛す。
建武二年七月　新田義貞　尊良親王を奉じ之を討つ。中先氏の乱（北條時行の乱）信濃に兵を挙げ鎌倉を攻める。
延元元年　尊氏京都を略取　官軍之を討ち　九州に走らす、尊氏九州兵を率いて上京　湊川合戦に楠木正成討死、新田義貞　名和元年　討死
延元三年　足利尊氏　征夷大将軍となる。
北朝暦応元年　四條畷の合戦　楠正行討死
正平四年　北朝暦応元年　親房の義起る　尊氏と弟直義との争い
正平六年十月　尊氏は直義と南朝方に攻められ　南朝方に降る（義直を攻める為の政策）
同十二月十七日　高麗経澄　鬼窪にて兵を挙ぐ。
正平八年　京都奪取戦　以後十六年間続く。
康安元年　畠山国清討伐　基氏に白旗一揆平一揆に命ず。
元中九年　南北統一
応永二年　上杉氏憲乱を起す。
応永六年　応仁の乱

応永二十三年　上杉禅秀の乱（上杉氏宗のこと）足利持氏と争う。

正長元年（一四二八）　足利持氏　乱を起す。

永享十八年（一四三八）　足利持氏　鎌倉に乱を起す。

永享十三年（一四四一）　永享の乱　持氏、義久自害　春王　安王　殺害、賢王（茂氏）助命　結城合戦を最後に平定される。

嘉吉元年（一四四一）　嘉吉の乱　将軍義教赤松に殺される

康正元年（一四五五）　足利成氏　古河へ逃げる、古河公方

（一四六六）応仁元年　岩付城　江戸城築く　太田道灌・道信

文明九年（一四七七）　山名、細川兵を挙ぐ、応仁の乱

応仁の乱ようやく治まる、戦国時代京都市中荒土と化す。

文明十年（一四七八）　国府台合戦、道灌は一族を率いて国府台へ出陣千葉自胤と戦いて境根原の戦ノ白井城を落す

文明十八年（一四八六）　太田道灌　上杉定正により暗殺

延徳三年（一四九一）　伊勢新九郎長氏　伊豆の堀越公方滅す。

明応四年（一四九五）　伊勢新九郎長氏　北條早雲と改名、小田原城乗取る、大森実頼三浦氏のもとへ逃る。後北條家起る。

以上　野手党の名が歴史上に見えてより、消え去るまでの間の歴史的年表を一覧表として　大方書き出して、御参考に供しました。

（平常胤（千葉平氏　五代目　八十三才　正治三年三月廿四日卒））

治承四年（一一八〇）　源頼朝が、伊豆で兵を挙げ　そして敗れて安房国に逃れ、此の時千葉平氏の棟領、平常胤は一族を率いて之を迎えました。間もなく北上して　下総　上総　安房　武蔵　常陸の全域に強大なる勢力を持ちました。千葉平氏の一族の後援のもとに、関東諸所の源氏に恩顧を持つ諸将と地侍達を集めて一大勢力を結集しました。

下河辺　葛西　安達　江戸　畠島　河越　畠山　北条　能谷　児玉等々　八幡太郎義家以来の源氏に恩顧の諸将の他　中ッ武士達そして棟梁的部将を短期的に掌握することに成功したのであります。当時頼朝に従って活躍した埼玉出身の武士の内吾妻鏡に記載されているものは、百五代にのぼります。現存の郡別でその分布を見ますと、北足立郡七、入間郡二ッ、北埼玉郡六、南埼玉郡六、北葛飾郡七、となっており　県北に比較的に多くなっています。これは県北が早くから開発されて武士

遠の根処地があつた為てしよう。

では次に鎌倉初期より活躍した野手党諸氏の動向を吾妻鏡その他から註出して見ましよう。

保元平治物語　源平盛衰記　太平記等には文学的であり　記録的氏姓名は野手党諸氏の名はほとんど見受けられませんので、吾妻鏡を中心に註出します。

元暦二年（一一八五）三月十四日　鬼窪小四郎行親　源頼朝の使者として西海の範頼の陣に下向す。

文治二年（一一八六）　北條時政　洛中に遣発す。洛中警護の者　野手五郎太郎　同三郎　同三郎等が選出さる。

建久元年（一一九〇）十一月七日　頼朝入洛の際　その供奉人に多賀谷小三郎（重基）見える。

元久元年（一二〇四）　阿弥陀寺大壇那　出戸右衛門尉為隆の息為業を発願人として、南鬼窪小四郎行親　下河辺行平　春日部右兵衛尉実光　他野手　私市熊谷の党　数多の資材を布施して堂坊を再興す。

承久三年（一二二一）　承久の変　宇治橋等の合戦あり。於橋上被討者の氏名に道智三郎太郎（能員）名見える。

嘉禎四年（一二三八）　頼経　六波羅に着　その供奉人に大河戸民部太郎　大井三郎　品川二郎実貞　春日部三郎実貞　春日部三郎兵衛尉　下河辺左衛門尉　大河戸太郎兵衛尉　栢間左近将監（李直）か　多賀谷太郎兵衛尉　同太郎兵衛尉　春日部左衛門尉　大井太郎光長　大河戸民部大夫

嘉禎四年十月十三日　頼経　関東に下向　その供奉人に春日部、下河辺、大井　品川　大河戸　多賀谷　栢間等見える。

仁治二年（一二四一）十月七日　其勾太郎師政　永久の変の武功を賞され　多摩の荒野を拝領す。父左近大夫政高が勢多橋の軍忠心がありしも　今日まで延引されていた。

仁治二年十二月廿四日　多摩川上流に堰を設け　その荒野を水田に成す様命ぜり　栢間左衛門尉（行重）か　多賀谷兵衛尉等　奉行人に定められる。

寛元元年（一二四三）十月八日　野手党の一族　須久毛六郎経高が建碑したか、善念寺開山に関係ありや、十月八日此の日の記銘の青石板碑　埼玉南部　最古の碑あり。岩槻市笹久保

建長元年（一二四九）
越谷市御殿地に此の年紀の書石板碑あり、古志賀谷氏の建碑か、

建長二年（一二五〇）
南院殿造営雑掌日録に栢間左衛門入道見える。

建長三年（一二五一）
由比浜の御弓始に　多賀谷弥五郎重茂

建長四年（一二五二）
御弓始の時　多賀谷五郎景茂見える。

建長五年（一二五三）正月九日
御的に　多賀谷弥五郎見える。

同正月十日
御所的始めに多賀谷弥五郎重茂が見える。

建長六年（一二五五）正月四日
的始　交名申状に　多賀谷

同正月九日
由比ヶ浜　的始め　多賀谷

同正月十三日
的始め　多賀谷

同六月二日
奥州道に夜討強盗蜂起し　往来の旅人難儀す、その警護人を　その路次の地頭に仰付けらる　本日その教書が下る。
浅江太郎兵衛尉　他廿四名が交名されている。陸奥道に添うたる地頭がその警護の任に当てている。
幕府的始めに畠間左衛門次郎李忠

マクモ善念寺跡
越谷市御殿地に此の年紀の書石板碑あり、古志賀谷氏の建碑か、

同院殿造営雑掌日録に栢間左衛門入道見える。

由比浜の御弓始に　多賀谷弥五郎重茂
景茂見える。

御弓始の時　多賀谷五郎景茂見える。

御的に　多賀谷弥五郎見える。

同正月十五日
御所弓場にて弓始めあり　多賀谷将軍家二所詣で　進発の供奉人に鬼窪左衛門入道（弘家）　弥民部太郎（弘重）子五々、鬼窪又太郎（行親の未孫）等見える。

正元二年（一二六〇）正月十三日
浜（由比）御的行われ　栢間左衛門次郎（李忠）十中九的を射る、

同月十四日
御弓始めに、栢間氏十中八的を射ると見える。

弘長三年（一二六三）
浜（由比）御的行われ　栢間左衛門次郎　見える。

文永二年（一二六五）正月十三日
御弓始めに　栢間左衛門次郎行泰

文永九年
大蔵次郎左衛門尉盛李は名護屋尾張入道見西を誅する討手に見える。

建治二年（一二七六）
真言宗徒の小山、下河辺系と　日蓮宗の野本党系との宗教争いで　高野阿弥陀寺焼失す、この時参集する　南部氏は

下河辺系
吉羽左衛門佐家仲
神明内相模十郎豊光
神崎右衛門次郎行武

平野小五郎助広
木立左馬次郎信清
平須賀太郎左衛門正安
田宮摂津入道宏山
以下 二〇〇余名
阿弥陀寺方には
産女ヶ井三郎左衛門直広
出戸右兵衛尉宗政
江下野備中次郎秀信
杉戸五郎左衛門明邦
鬼窪党の折原八郎左衛門房秀
美野輪藤六治政
等が見え 防戦空しく敗北す
昨年の宗教争いにて焼失したる阿弥陀寺を 鬼窪氏、春日部氏、谷古宇氏、出戸氏、結衆有財を寄進し堂房の再建に盡力す。
平左衛門尉頼綱入道景円謀叛の討手に西脇左衛門尉李忠と遠智六郎泰光は鎌倉経師谷にて討死した。
金重真輪の本拠地近くの蓮田町辻谷口には、高さ四・六メートルの名号板碑（お虎子石）が有る。裏面に、己上銭百五十貫と記されて当時の費用を知ることができる。

建治三年（一二七七）
正応六年（一二八九）
延慶四年（一三一一）三月八日

正和三年（一三一四）三月九日
元享三年（一三二三）十一月
嘉歴元年（一三二六）十一月
観応二年（一三五一）十二月十七日
観応三年（一三五二）二月十日
文和二年（一三五三）
延文六年（一三六一）

江ヶ崎 久伊豆神社 鰐口銘に檀那江ヶ崎沙弥行蓮（頼景の父か）とある。
元享三年十一月記銘板碑 江ヶ崎久伊豆神社近くより発見 平頼景（鬼窪氏枝流の江崎氏）と記されている。鰐口と共に花井氏方に保存されている。
越谷久伊豆神社で発見されたる青石塔婆有り。
高麗彦四郎経澄武州鬼窪（石井所）にて挙兵 野子党これに従い、翌十八日鬼窪を発ち府中に向かう。十九日羽根倉（浦和市）にて難波田氏と戦い、これを敗る。
高麗経澄軍忠状に人見ヶ原にて合戦の際 渋江左衛門太郎や鬼窪弾正左衛門尉が、同廿八日 高麗ヶ原の合戦に鬼窪左近将監も見える。
越谷八幡神社 同年記青石板碑が発見されている。
市場の祭文に騎西郡に八ヶ所 太田庄

五ヶ所　下河辺庄五ヶ所の計十八ヶ所の市場が開かれている。野子党支配地の騎西郡の八ヶ所の市場とは次の如くである。

黒浜市（蓮田）、瀧市（蓮田町）、行田市（行田市）、八條市（八潮市）、末田市（岩槻市）、平野市（蓮田町）、久保宿（岩槻市）、富士宿（岩槻市）、以上である。　岩井茂氏研究より

平林寺は石望善秋の開山　鐘銘には大檀那沙彌藍沢としてある。現在此の鐘は下妻市大宝の大宝八幡神社蔵

鳩井美濃三郎義景は栖岡郷を鬼窪某より買得した。

永和元年（一三七五）

永徳元年（一三八一）四月十三日

永徳三年（一三八三）

渋江賀入道は慈恩寺領である。太田庄花積郷（春日部市）御厩瀬船及び渡場を押領したので、慈恩寺遍照院僧世坊は、これを鎌倉府に訴えたので足利氏満はこれを糺明したことが見える。

騎西郡渋江郷金重村平林禅寺梵鐘の中に次の手記見える。

武州埼西郡鬼窪八幡宮　鶴口

宮徳五年八月十五日　聖秀尊

嘉慶元年（一三八七）十二月十三日

宮徳五年（一三八八）八月十五日

寛正六年（一四六二）

越谷市御殿に於て建長元年の板碑と一所の処に建立されている。

敬白　奉懸　新方荘長宮（川通）

奉取鶴口一守　旦那孫九郎家吉

大工渋江住泰次　文明六年卯月十五日

文明十八年（一四八六）卯月十五日

越谷天獄寺中興開基　旦那太田下野守と云う。

以上の記録並びに青板碑、梵鐘　鶴口などの記銘を見てきました。

野子党一族の資料は誠に少いので　これだけでは明瞭なる解明にはなりませんが、平忠常が武蔵押領使に任じてより（一〇〇〇年頃）歴史の中に躍り出し、源義家の代には、武蔵七党の一勇として奥州に勇を馳せ、源頼朝の挙兵には最大の戦力として応援し一族皆鎌倉幕府　の立役者となりその一翼を担い、元寇の役には一族挙げて戦に出陣奮戦しました。

建武の戦いには足利尊氏方に従い　南北朝時代を生き抜き　三百年間埼西郡一帝に繁栄して来た野子党が、足利幕軍家と鎌倉公方家の確執の渦の

中に巻き込まれて、影が薄れ　そして上杉家の対頭の為に消え去ってしまいました。この名門の人々の足跡、そして生き残った枝族達の苦のう等々、五百年後の現在ではその人達の居住した事すら忘れ去られてしまいました。このかすかな痕跡をたどり　昔時の武将の活躍を偲び我々郷土の開発者が如何に郷土の自然を愛し護って来たかを推察することができます。そしてその努力に敬服と驚異と親愛の念を禁じ得ません。ここに郷土史研究の意義を感ずる次第であります。

菖蒲城

日本城郭全集より

竜臥城とも云う　南埼玉郡菖蒲町字新堀

平城　城主　金田則綱　築城　康正　二年

菖蒲（あやめ）の名の起こりは、前古河公方、足利成氏の臣金田式部則綱（近江源氏の子孫、佐々木氏）が現在の大字新堀菖蒲に城を築き、これが完成したのが　康正二年五月五日、菖蒲の節句の日であったので　菖蒲城と名づけ住んだので　菖蒲と称するようになったという。

いま此の城址とおぼしき地は　土塁　空堀の跡もなく、約三畝十八歩（約三〇〇㎡）ほどの地を菖蒲城址として保存している。付近は水田に囲まれておよそ一町歩（一〇、〇〇〇㎡）の丘となっている。南西にかけて沼地があり此の湿地を利用して築城した平城であったと思われる。およそ文献も図面もほとんど見当たらないが伝えるところでは、その形から竜臥城とも呼ばれたという。「新編武蔵風土記稿」に「鎌倉大草紙」足利成氏武州府中の軍敗れて　当城に退きしこと見ゆ。金田は本姓佐々木

にて、子孫源四郎秀綱「成田下総守氏長に屈し、天正十八年没落して、それより廃城となれり。按に成田の分限帳を見るに、源四郎秀綱というものはのせず、金田備前　金田斉宮などいえるもの見ゆ。此等もこの城に籠りしにや」と記している。又菖蒲町吉祥院成田山安楽寺の開基は　菖蒲城主佐々木源四郎と伝える。

物見塚として、「附近に物見塚あり、高さ一丈面積僅かに三十坪許、相伝ふ　天正十八年小田原攻めのとき城主秀綱は忍城に籠り其子安房等爰に戦死せるを埋葬すと、今傍に地蔵堂あり」と記されるこの塚について、今は知る人も少いが、あるいは菖蒲城に関係のある物見の場所でもあったのであろう。

江ヶ崎城

南埼玉郡蓮田町大字黒浜字江ヶ崎　平城

築城年代　鎌倉期　土塁　空堀残す

此の城は複雑に入り組んだ巾広い台地の中央部にあり、かなり古い時代の館城的な平城である。一、二年前まではその姿をかなり残していたが、最近この城地に住宅団地が築かれ、遺構の大部分が破壊されてしまった。

「新編武蔵風土記稿」に「二居及垣の跡のこれり、城郭なりと伝へりしと記され、北葛飾郡高野村永福寺所蔵の「竜燈山伝燈記」という書に「治安年間悪党大太郎が黒浜野に城を構え、同地の横帝長者、江浦太夫一族を殺戮した」という記載があるのをみて、果してその城が江ヶ崎城であるかどうかは確実でなく、詳しい歴史は伝わっていない。ほかに「吾妻鏡」に名の見える鎌倉時代の豪族鬼窪小四郎行親の館跡ともいはれたり、土地に残る伝承で新羅三郎義光の子孫とその一族の居住の地と伝わっている。

城址は、一辺約八十米の正方形に近い本郭の形がよく残り、その外側を巾五米、深さ一米の空堀がめぐり、南北二ヶ所に土橋を渡した虎口が見られた。しかしいまはその東側の一部と外郭の一部の堀　土塁の一部が残るにすぎなくなってしまった。外郭は現在東、北、西に一部分みられる。その中で西側を土塁がわずかに平行して延びている。又一部には三重に土塁の跡が見受けられ　往時このあたりの外郭は三本の土塁の間に二重の空堀が

あったものと推定される。また現在残る本郭の東側部分の東二十米ほどのところにわずかに空堀が残り、これに直角に細い溝の交わるのが見られるが、これは堀に水を引くための水路と云われている。

以上のことにより此の城の存立期には本郭の廻りを外郭が取り巻き「回」の字形の縄張りがめぐらされていたのではなかろうか。そして外郭の一辺は百五十米ほどの長さであったことが推定できる。

これらの事由から、（伝承なども含めて）今見られる遺構は、鎌倉期のものであると推定できる。このような古い時代の、まして比較的良く遺構の現存した城が、人為的に然も大規模に破壊されたのは残念である。

太田陣屋

南埼玉郡白岡町太田新井

この城（陣屋）は、一時太田道灌も居住したと云えるが定かではない。唯此の城は戦国の頃、岩槻太田氏の持城であったことはほゞ確実であるが今となっては城の（陣屋）規模がわからないので其の性格推察されない。

栢間城

南埼玉郡蓮田町下栢間沼尻

此の城は下栢間の東方にあったが、今は遺構を止めていない。栢間の地は古く武蔵七党野子党の萱間氏の根拠地で栢間城も古くは萱間氏の館であったものかとも思われる。だが栢間城の存立が明らかになるのは、それより後戦国の頃になってからで、鳩井将監という者が城主であったと伝えている。事実「新編武蔵風土記稿」に熊野神社の棟札がのせてあるが、これに「大檀那鳩井息女鍋殿云々 永禄十三年」の文字があり、また鳩井美濃三郎入道浄景という名も記載されている。鳩井氏没落ののちは、忍城主成田氏の家臣鴨田築後という者が、城主として在城したというが定かではない。

丸城（まる城）

南埼玉郡蓮田町　城

此の地は、四方を水田（深田）で囲まれ、小字名の城が示すように古くは城のあったところというが、城主、年代とも不明である。

寅御石

蓮田市馬込字辻

寅御石は、馬込字辻の共同墓地の中に屹然としてそびえている板碑である。碑名には「報恩真佛法師。延慶四辛亥三月八日敬白　大発主釈唯願」と刻されているから、此の碑は親鸞門下の常陸の唯願が浄土真宗高田派の祖である真佛坊の報恩の為に建てた事を語っている。ところがこの報恩塔には長者の娘の親が娘を殺してその肉を多くの求婚競走者に喰わしたという伝説が結びついている。

此の虎子石の伝説は数説あるが、その内容は似ているが中で一番人物名がよく出ているのを記すことにしよう。

「大宮市史」によると

（永仁の前霜月）承久の乱の直後三浦義直は京都へ妻と女児を遣し行方不明になってしまった夫の後を慕って妻も京都を離れ、奥州へ落ちのびようと馴れぬ旅路の野山を越えて武蔵国へ辿りついた。京都を出立してから早や一年の月日が流れて女児は六才になった。原市から岩槻への道すがら辻谷へさしかかった時妻女は急病になり、道端のとある農家に休ませて貰ったが　長旅のつかれも加って農家の老夫婦の看護の甲斐もなく、床について三日目に永眠してしまった。老夫婦には子供がなかったので天の授りと思って虎子と名付け育てることにした。

虎子はすくすくと老夫婦の愛情を一身に受けて育ち　由緒ある血すじは年頃になると一層上品さを増し、美貌に加えて大変な孝行者だったので、老夫婦の悦びは大層なものだった。

虎子が十六才になった頃は愈々美しさを増して近所の若者達の評判娘となり　昼となく夜となく遊びに来るものが多くなった。其の頃岩槻の地頭職に浅江光資と云う者があり、その一人息子に光春という若侍がおった。延慶四年三月のはじめ野狩に出た帰り道、たまたま虎子の美しさに心を奪われ、何が何でも嫁にほしいと権力にものを言わせての難題を連日のように持込まれ、その上沢山の求婚者があるので　すっかり当惑した老夫婦

は毎日のように心を痛めてよりより相談をくり返したが、良い考えも浮ばない。その成り行きをそっと自分の心の中で見つめていた虎子はこんなに多勢の求婚者があっては誰の処へ嫁いでも不幸を作るばかりと思いつめ、死を選ぶことで自分の幸福をつかもうと決心した。

老夫婦は虎子の死をなげきかなしんだが、その虎子の心を汲んで求婚者一同を招待して盛大な御馳走をふるまった。あとから老夫婦より「只今馳走申し上げた娘よりのささげものは、まことを申せば娘の腿の肉でございます。お虎は あまり皆様の御執心かきついのでいづれへ参ったが良いかに迷い、毎日の皆様の御催促に苦しみ抜いた上、悲しい自害をいたしました。いまわの願いにせめて自分の肉なりと皆さまに御馳走して皆さまのお心の等分に立つようにとの願いで今日御招ぎ申上げた訳でございます」。

この話を聞いた一同は唖然としてしまった。自分達の為に若い蕾を自ら散って行った虎子の供養を思いたち 早速桃久の山奥から板碑を運び建立、花園天皇の正和元年に名僧を招いて碑面に「南無阿弥陀佛」と彫り、下には延慶四年三月八日と虎子の死んだ日を書き添え、正和二年三月八日には盛大な建碑供養が取り行われた。

「南埼玉郡白岡町の板碑」

越谷市郷土研究会
星野昌治

年号	主尊	所在地	備考	寸法
弘安九年	弥陀一尊	日勝、丸山墓地	現在不明	
暦応二年	欠	篠津、興善寺	光明真言	
暦応三年八月	弥陀一尊	寒谷、東光院		12×7
応永十五年六月	弥陀三尊	篠津、正福寺		25×7
貞治	弥陀一尊	篠津興禅寺	光明真言	76×30
不明	〃	〃		24×13
〃	〃	〃		96×32
〃	〃	下大崎伊東家		49×7
〃	〃	篠津、正福寺		8×6

◎ 興禅寺にはこの他に二十七片の破片がある。

〔考察〕 白岡町には有紀年名の板碑が五基しかなく、そのうち、一番年号の古い弘安九年のものは「昭和四年から昭和十一年にかけて調査した橋村相元氏の青石塔婆集に記載されるものであるが、現在不明である。とくに珍重される板碑は篠津興禅寺には 薬師彫りの弥陀種子の大きな板碑が目をひく。鎌倉期の造立と推測されるが年号不明なのが残念である。なお興禅寺に出土された土器の破片なども多数所蔵している。

蓮田町馬込の名号板碑

越谷市郷土研究会
星野昌治

南無阿弥陀佛の六文字を表わした板碑を われわれは名号板碑と呼び、主に時宗系真宗系の祈名念佛衆徒が造立したものと考えている。越谷市にも一基 文和三年のものが東方中村十筑氏墓地に造立されている。

蓮田町の名号板碑（右図）は高さ四米、上幅六十七糎、下幅七十七糎、厚さ十五糎の大きなものであり、文字の太さも十糎、その深さ四糎もある。

下部銘文でみる通り、これは浄土真宗高田派の祖である真仏房の報恩塔で、発願主の唯願は親鸞門信交名牒にみゆる常陸国の唯願である。唯願の遺跡は吉川町にあるから この辺を布教の時造立したものと考えられる。銘文の中で真仏の「真」や唯願の「唯」、釈姓などは真宗系と特徴であり、同じ名号板碑の中で時宗系とされる阿号の法名を用いたものと区別される。

なお背面に銭、已上 百五十貫とあるから銭百五十貫を喜捨して造立したものと考えられる。

（新編武蔵風土記稿の内、上記に関係ある所存を記す。）

⑥ 菖蒲町

菖蒲町は村内巽より乾の方に通じたる町にて古は宮宿と唱へしと云、今は本町と呼ぶ所四町有て、其東の末より巽にをれて続きたる所を横町と唱ふ、元は本町のみなりしが、享保の頃より次第に家屋立連りて此横町となれりと云、毎月二七の日を以て市の定日とし、米穀及び農具其外の品を賣ひ（ヒサ）げり、当所より所々へ継立の場は、西の方鴻巣宿への街道は笠原村迄、西南樋ノ口宿及び原市村への往還は高虫村へ継ぎ巽の方上尾宿の道は小針村、岩槻道へは根金村新田迄、寅卯の方、久喜町、北の方鷲宮村、西の方加須町、騎西町等すべて九ヶ所への人馬継立の場なりされど其の定数もなく、元より地子免許の地と云もあらず、何時の頃より継場の町となりしや詳ならずと云えども、前にも言る如く享保の頃より繁栄の地となりしと云へば、其の前後の事なるべし、

小名　馬場　中井　陣屋　堀内　登戸　塚田　新田

袋田明神　祭神は稲田姫命と云御神体銅鏡にて本地薬師の像を彫れり、裏に寛文九年九月と見ゆ　合体に鷲宮、久伊豆の両社を置り

若宮八幡社　延命院持

若宮八幡社　延命院持

若神院　新義真言宗　山城国醍醐報恩院末　袋田山安穏寺と号す　寺領二十九石九斗壱升二年御朱印を附せられ　本尊不動は立像にて、長さ三尺餘弘法大師の作と云伝ふ、開山を弘鏡と云開基は古菖蒲の城主佐々木源四郎と云人なりと、佐々木の事は新堀村の條合せ見るべし

慈眼院　観音堂　長福寺　阿弥陀堂　延命院
地蔵堂　御恵庵　真如庵　光明院　千手院
天聖院　阿弥陀堂　観音堂

長更　古くより住せりと今戸数三十餘あり、寛永の頃村の筆記に　機多の住せる事見ゆれば、其以前よりありしこと知らる。

⑦ 新堀村

新堀村は民戸百七十五、東は三沼代用水堀を隔て上大崎村　南は小林村　西は下稚足村　北は星川を界として　芦塩・戸ヶ崎村の二村なり　東西十三町餘　南北三町に餘れり　領主の遷替江戸への里数用水等前村に同じ　検地年代は詳ならず

小名　矢足　宿　後新田　寄居　五軒屋敷

久伊豆神社　天神社　稲荷社二宇共に村の鎮守にして　一は南蔵寺持　一は観音寺持

南蔵院　新義真言宗　戸ヶ崎吉祥寺末　愛宕山福聚寺中興開山快印天和三年寂すと云　本尊不動を安ぜり

愛宕社　山王社　天神社　観音堂　観音寺　観王堂

太子堂

西願寺　浄土宗　足立郡鴻巣宿勝願寺末　薗墨山と号す、本尊不動を安ぜり

西本願寺太子堂　西本願寺持

浄昌寺　禅宗曹洞派　白岡村共濟寺末久林山と号す

開山は本寺二世の僧慶清　文亀元年正月廿四日寂せり　本尊釈迦を安ず

⑦ 城蹟　村の巽方にあり　今陸田となる　段別一町餘　村民五郎右衛門はもと佐々木氏のものにて　今は大塚を代とす其家系を見るに康正二年丙子五月五日足利成氏の臣　金田式部則綱と云者　当城を築きて菖蒲城と号し愛に住せりと、鎌倉大草紙に足利成氏武州府中の軍破れて　当城に退きしこと見ゆ　金田姓佐々木にて　子孫原四郎秀綱　成田下総守氏長に属し　天正十八年没落してそれより廃城となれり　按に成田の分限帳をみるに　源四郎秀綱と云ものはのせず、金田備前金田者宮など云へるもの見ゆ、是らも此城にこもりにしや

⑧ 笠原村

笠原村は江戸より行程前村と同じ　和名抄に笠原郷と載せしも当所のことにして　武蔵国造笠原直使主小杵等も此邊に居りて　其名残るべし　遥かせ下りて　東鑑に笠原六郎、笠原左衛門尉親景などいづれも当国の人と見ゆれば　則　に住して在名を名乗しにや　もとより　和名抄に出たる地名なれば古は農き地なりしを中古衰へ桑間の内に出せしとみゆ　或書に載する文書に、鳩井美濃三

即義景申賜得地、武蔵国埼西郡栢間郷内笠原村鳩井
在家田畠三町三段事　当地行之段私領之實否故放参
之有無尋究之、載起請之詞可被注申、次相論沼部口
可執達　承状之請文三状依仰執達如件　康暦三年四
月十三日　鳥屋口口殿沙彌と記せり是によれば　此
地は栢間郷の内に屋して鳩井氏の知行ありしこと知
うるる　今家数百八十餘　東は小林村、二貫野の二
村、南は元荒川を隔て、足立郡下谷中　当根、上谷
の三村にて　西は上下郷地の二村　北は境、上下種
足の三村なり東西十一町　南北十九町に及べり　当
村は人馬継立の地にして　南方中山道樋川宿へ二里
十町　鴻巣宿へ三十町　西の方羽生町場へ四里の継
立をなせり　其内鴻巣宿より当村にかゝり騎西町場
へいたる道筋は慶長十二年東照宮御放鷹の時御通行
のため　永井信濃守より　柴山　荒井新田　白岡
藤津　上……

◎　栢間村

栢間村は江戸への行程は前村に同じ　太田庄に屋
し　郷名は伝へざれども郡内笠原村に載せし康暦三
年の文書に　武蔵国埼西郡栢間郷内笠原村とあり
又式書に載する應永六年の文書に　当所の名見えた
り　其文に

鳩井美濃入道義景申　武蔵国埼西郡栢間郷内、
政所　石程島　沼尻三ヶ村事　可有其御沙汰、
不日、可御使之状　依仰執達如件、
應永六年九月廿九日

沙彌　花押

是等に據ば中古郷名にも唱へしこと知べし　元よ
り栢間の名は上古より聞えし地名にて　當国七党
の内野本党の系図に　野本小太郎行基の三男を
當間六郎弘光と云　其後李平其男太郎女重を始と
し、當間氏の者数輩見えたり　今栢間と書て　唱
にはかやまと呼べり　されば文字は違へど　同じ
此地名に依て唱へしにや、又東鑑にも當間左衛門
次郎李忠或は栢間左衛門次郎行泰と云人見申世を
以て推に正嘉頃の人なり　其内左衛門次郎行泰は
既に七党系図にも見えたれば　栢間の名古きこと
疑なし　又前の文書に載る所の政所　石程島の地
如今なし　沼尻の名は今村内小名に唱れば其地な
るべし　民戸三百四十戸　東は小林　芝山の二村
南より西は元荒川を隔て　上平野　高虫の二村及

び足立郡小針領家　五町台下加納　上下の沼光北上町七村に堺ひ　北は武蔵野村なり　東西凡三十町、南北十町許　此地は御入國の後　内藤四郎左衛門正成に給はりしと云　増補家忠日記曰　慶長七年四月六日内藤四郎左衛門正成　武州稲田の郷に於て病に臥す累世舊功の御家人たるに依て　台徳院殿御衣鉢あり　醫師久志本左京亮を稲田郷に差遣され　療養を加るといへども　重病たるに依て此月十三日七十六歳にて卒すと　又内藤家譜に曰　正成が長男甚市郎正貞故ありて流浪す次男右京進宗成家督を継ぐ其國書助某に至て改易せらる此時甚市郎正貞が長男外記正重別に召出され　御持弓の頭を勤居しが　寛永八年三月八日江州森山及相州波多野戸室下総国日暮小金瀧村武州北野上総国大上等の旧領を改め　稲南村五十石を賜ふ　時に上意ありて曰　紐又正成死後遺領を右京進宗成へ賜ひ　宗成没後其男國書某へ賜はりしが罪ありて改易せらる

正重は正成が嫡孫たり　且勤仕怠ざれば　此地御加増にはあらずと雖ども　賜はるの旨台命に依て此地を領すと云　しかりしより以来子孫連綿として今伊豆守正弘に至て知行せり　又甚市郎流浪して駿府に蟄居してありしを上聞に達し　仲正重が領知の内に遣べき旨　然不久古衛門、本田蒜四郎、後蒜左三郎等中により当村に於て寛永十一年五月十日八十二歳にして卒す　検地は正保三年地頭内藤が家にて改めり　又村の東に村添の新田あり　笑地元は大沼なりしが　寛保十三年井澤弥惣兵衛命を蒙りて開発し畝歩銭を貢しを　延享三年神尾右兵衛検地して高入となり　此地は始より御料所にて今に然り

小名

沼尻　村の東にあり　前條に出す　慶永六年の文書に見えたれば　古は村名に唱へしに

や　政所　石程島の地名今なし

小竹　村の西にあり　村民左石衛門が蔵する天正四年の文書に　六貫七百五十二文小竹長沢分と載たるは　別当所の事なるべし

養静寺　古かゝる寺ありし地なるべけれど　今は其伝へなし

足軽町　村の西をふ　元地頭の足軽住せし地

なるを以て此名ありと

宮原　天沼　内袋　宿　本郷　在家　宮ヶ谷戸

陣屋　村の西にあり　横一町　竪三町許の地なり　四方に垣を結廻せり　内藤四郎左衛門正成此地に住し　後鎌倉の士一統江戸に移りしより　こゝには留守居として在住の家人一人　其餘江戸より　家人一人づゝ交代して守らしむ　今に至って然り

神明社　村の鎮守　正月十四日箭粥の神事を行ひて年の豊凶を占を以例祭とす

久伊豆社　梅松院持

三山獄権現社　正法院持

稲荷社二宇　一は蓮華院持にて　三角稲荷と唱ふ　一は村民持なり

菩提寺　浄土宗　京都智恩院末　寺領五十石は慶安二年十月十七日御朱印を賜ふ　国豊山天龍院と号す　開基は　地頭四郎左衛門正成が草創にて　今に菩提所となせり、正成法名は天龍院殿源誉吉宗居士と稱す　開山は了蓮社覺誉なり、本尊阿弥陀を安ず、

然禁社　天神社　阿弥陀堂

観音堂　鐘楼　重　寄附の鐘をかかぐ

来福寺　禪宗洞派　上野国邑楽郡堀江村茂林寺末　寺領十石慶安二年十月御朱印を賜ふ、光明山と号す　古は天台宗にして村内妙法寺宗徳寺は皆当寺の寺中なりと、延徳元年当宗に改めたれば　夫より前の事は伝へず　故に改宗の僧瀧桂正香禪師を開山とす、大永三年十一月五日寂す　中興僧中孚東天は天文十七年二月五日寂す　本尊十一面観音を安ず

大御堂　弥陀を安ず　此堂を堀河山妙法寺と号す、足　往昔当寺の塔頭なりしが　何の頃よりか境内の一堂となれり　此堂は大同元年　造立のまゝなりと云、其正しきを知らずされど其造り様古色にして　古き事は疑べくもあらず　寛政の末屋根の葺替せし時　廻り七寸

程の棟竹に左の文字を彫しものを見出せり　其文に

妙法寺ふきかへ時に　永禄三庚申二月廿八日や
なかゝ本とりかへ申候、かよふに書し者ゝ尾張
国萬松寺の等節の弟子沙門真哲也、其年このか
や付候をり大雨降り申候かきをくも形なれやの
せのながらんしるしともせん
南無阿弥陀佛　大本願道在沙門也　一念弥陀佛無
量罪
かや凡八百駄あまりよけい申候　御心あるべし
此竹　其時切取て秘置しが後焼失せりと、

辨天社　鐘樓　正徳三年新造の鐘を掛く

宗徳寺　幸福寺の門徒なり此寺も前に出す如く
元幸福寺の寺中なれば　古き寺なること
と知るべし　然れども開山も伝へず　木尊薬師を
安ず

正法院　新義真言宗　足立郡上深井村寺命院末
寺領十石八斗は慶安二年賜ふ、慈眼山と
号す　僧円俊文明中草創すと云　本尊不動を安ず
と云

観音堂　長三尺許　立像の正観音を安ず　行基菩
薩の作と伝ふ　此堂に文明年中の棟札あ
りと云ふ

地蔵堂　熊野社　社中に古き棟札あり

同　大檀那嶋井息女鍋殿
大工太郎左衛門
梵字　奉新造營熊野那智山權現
宝殿一宇本願光義
同　永禄十三年庚午三月十一日

此嶋井氏の事村内に城跡ありて　古く当所に住せ
し人なれば当寺に由緒も残りしなるべけれど　此
他の事実になし

鐘樓　延徳五年の鐘をかく

正福寺　同宗末　金花山と号す本尊大日安ず

愛宕社　牛頭天王社　辨天社　薬師堂　天神社

遍華院　当山修験　京都三宝院末　稲荷山と号す
開山を清辨と云本尊不動安ず

梅松院　新義真言宗　足立郡上深井村寿命院末
昌蔵山延命院と号す。

成王院　羽黒術人派　江戸日本橋音羽町普門院の配
下本尊大日を安ず

◎古城跡　村の東方古名沼尻にあり　今田畑となり
て昔の境界分ち難し　古くは鳩井将監と
云者　此所に住せしと云　村内正法院の熊野社に蔵
する　永禄十三年の棟札に　大檀那鳩井殿息女鍋殿
と載たれば　其頃迄は鳩井氏が住せしこと明けし
又同郡笠原村に出せる康暦三年の文書に　及前條に
出せる應永六年の文書に　鳩井美濃三郎入道浄光中
武蔵国騎西郡稲間郷内政所なと云るを以て考れば
鳩井当所に住する事知るべし　又里人の傳に鳩井家
没落の後は成田が家人隠田筑後と云者住せりと云

今子孫村内に在て　左次右衛門と云り
落家者庄右衛門　先祖を福田幸十郎と云　因幡守
親に仕へし者にて　某が次男なり　成田左衛門尉泰
歳にて死せり　天正十七年二月十五日三十七
るもの一通あり　文書一通左に載す　又由緒を記せ
れば　全くは載ず　させる證ともなりがたきものな

本分
十四貫貳十五文福田幸十郎
島四町五段　小竹
六貫七百五十文　長澤分
以上貳十貫七百七十五文
右差遣者也
天文四丙子九月十九日
福田幸十郎殿

⑥ 上大崎村

上大崎村は昔新庄と唱ふ、古へは駿西領に属せしと云、当村もとは上下及び荒井新田を合せて一村なりしを、慶長年中荒井新田を分ち、又元禄以前に上下二村に分れたり、寛永の頃は、板倉周防守知行し、同九年に上りて御料所と南條喜兵衛・川副六兵衛が采地となれり、後年御料の内を大田某が賜ひてより当村は南條権之丞、大田市左衛門が二給に賜ひ、川副が采地と残る、御料は下大崎にあり、検地は寛永八年板倉周防守改む、戸数百軒、東は下大崎村、南は荒井新田、栄山の二村、北は星川を限りて戸ヶ崎、三ヶ村、台村等に界へり、東西二十町、南北五六町程、水利江戸への里程等は、当村及び下の二村ともに前村に異ならず

小名　上中下

⑦ 神倉龍蔵権現社　村の鎮守なり、祭神詳ならず

十一面観音　愛染の二像を本地佛とす　金剛院持

愛宕社　八幡社　稲荷社

金剛院　新義真言宗　戸ヶ崎村吉祥寺末　神倉山龍蔵寺と号す　本尊不動を置り

薬師堂　普門院　同末富士山永久寺と号す　本尊は不動を安ず

長松寺　禅宗曹洞派　三ヶ村長龍寺末　慈雲山と号す　観音を本尊とせり

観音堂　地蔵堂

⑧ 白岡村

白岡村は私市庄と唱ふ、江戸よりの行程十一里、東は寺塚村、南は小久保、新宿の二村、西は元荒川を隔て貝塚、中宮戸の二村にて、北は篠津村なり、西方の境り共に十三町許、家数九十餘、当村郷名は伝へざれど村内八幡社享徳五年の鰐口に奥州八幡宮とありまた高麗郡新堀村聖天院にかけたる懸仏に二年の鰐口に、久伊豆御宝前鰐口、願主衛門五郎、武州駿西郡鬼窪郷佐那賀谷村と載す、此佐那賀谷は今も貫ヶ谷と書きて近村なり、然れ

ば此辺すべて古は鬼窪郷と言しならん　今隣村小久
保村に鬼窪氏の人あり、故に鬼窪の二とは彼村につ
きて見るべし、又白岡の名呂吉さことにして　当国
七党の内野本党の人に南鬼窪小七郎行親の孫太郎兵
衛新家の四男を　白岡禅師澄意と云　これ当所に住
せしものならん　御打入の後板倉内膳正重昌の領に
賜り　寛永十年替りて副六兵衛に賜り　今子孫勝
三郎知行す　水利及び検地は前村に同じ

小名　茶屋耕地　東耕地　山耕地　新田耕地

⑨八幡社　村の鎮守なり　正八幡若宮　八幡姫宮
八幡の三座を観請せり　社伝に云、当社
は建久六年右大将頼朝の命によりて　鬼窪某奉行
して造立し、この辺にて百餘貫の社領を寄附ありし
が　永享年中当郡新堀の城主　佐々木某社領を没収
し　篠津　白岡両村の内にて纔に十二貫之の地を寄
附せしが　是も戦争の項次第に衰へ　いつしか失せ
りと云　按に鬼窪氏は此辺に由緒ある人なれば　当
社を草創せしはさもあらん　佐々木の事は新堀村の
條合せみるべし　また今も社頭に享徳年中鐘口あれ
ば　かたがた旧社なることは疑うべからず　鐘口は阿
弥陀七分

⑩社馬社　昔神馬を繋置し厩ありしかば其の跡へ
社を建しと云、

神楽殿　鐘楼　延宝三年鋳造の鐘なり

別当　正福院　新義真言宗　アケ崎村吉祥院末　白
岡山西光寺が本坊と号す　本尊薬師
は慈覚大師の作なり　寺伝に当社は　寿祥二年慈
覚大師の草創にて　天台宗なりしが　建久年中八
幡社造立のとき改宗せりと云　されど古は薬師堂
と唱へしものと見えて　今も天文年中細繁と云人
よりあたへし寄附状を蔵せり　其の文左の如し

白岡薬師堂覚尚貫武百文之所領寄附候　於自今以
後者不可有相違　如件
天文十七年戊申六月朔日

細繁　花押

太子堂　山王社　鐘楼　延享四年鋳造鐘也

㊀興禪寺　禪宗曹洞派　遠州高尾石雲院末　泰栄山と号す　本尊は釋迦を安ぜり　寺領十五石餘は　天正十九年賜はれり　当寺は天台宗なりしが　文亀二年安雲禪師今の宗に改めたり　故に本雲を開山とす　此僧大永六年二月十五日寂せり　開基は佐々木氏とのみ伝へて其餘の事は知らず　按に此人は前に云新堀の城主なるべし

白山社　衆察　稲荷社

鐘樓　元禄十二年鋳造の鐘なり

本覺院　新義眞言宗　戸ヶ崎村吉祥院の門徒なり　慈眼山と号す　本尊正觀音を安ぜり　中興開山嗜意　享保十六年十二月廿日寂せり

光照院　同末にて稲荷山と号す　大日如来を本尊とす

㊁　三ヶ村

三ヶ村は菖蒲庄の唱あり此地明應の頃迄、寺中、大藏と言へる三ヶ所を合て一村となせし故の村名なりと云　今も是等の名殘村内小名にあり、江戸より

の行程前に同じ　民戸二百四十　東は台村・南は荒川を隔て上大崎村　西は戸ヶ崎村　北は中曽根村なり　東西の径り十三町余　南北十八町程、御入國の後門藏某に賜り、今子孫伊豆守の知る所なり　検地は寛永十七年の改とのみ云伝ふ

小名　辻　寺中　大藏　藏前

浅間前　金山　愛宕前

金山明神社　村の鎮守なり　永勝寺持

天王社　永勝寺持　富士浅間社　東光寺持

愛宕社　明昌寺持

長福寺　禪宗曹洞派　伊豆国加茂郡宮下村最勝院末　慈高山と号す　寺領十二石は慶安三年十月賜へり　開山存齋永正十六年十月廿日寂せり　本尊十一面觀音を安ず

鐘樓　鐘は寛文二年鋳造なり

阿弥陀堂

明昌寺　長龍寺の末　大藏山と号す　本山は五世
初翁天正四年十月廿二日寂せり　本尊
釋迦を安ず

圓覺堂　永藤寺　同末にて功德山と号す本尊聖藏
を安ず

◎東光院　新義眞言宗　アケ崎村若祥院末　医王山
と号す　開山眞慶　元禄九年二月十五日
寂せり　本尊不動安ず

藥師堂　同寺持

清淨院　当山派修驗　足立郡高尾村泉龍寺の配下
なり開祖良廣は寛永十七年四月十七日寂
すと云　本尊不動を安せり

◎小久毛村　附持添新田
小久毛村は江戸よりの里程　検地の年代前村に同
じ　繁昌郷私市庄と唱ふ　当村元は古久鬼と記せし
が一旦荒廢し　寛永年中再起して村落をなせし時、
今の如く改しと云　民戸八十　東は千駄野、野田の
二村に接し　南は實ケ谷村　西より北にかゝり白
岡、寺塚の二村なり　東西も南北も十五六町許当
村も若槻城附の村にて後米津某に賜り　子孫播磨
守に至りて寛政十年所替あり　同十二年松前若狭
守の領分となれり　夫も上りて文化六年平岡美濃
守に賜りしより其子石見守知行せり　此餘村の南
に持添新田あり　御料所にて享保十七年寛播磨守
私せり

小名本田　三谷耕地

久伊豆社　村の鎮守なり　諏訪社

稲荷社　以上の三社村持　地藏堂　興善寺持

寿藥院　禪宗曹洞派　白岡村興善寺末　大高山と
号す　本尊釋迦を安ず

◎舊家者文平　氏を鬼窪と稱す　先祖を鬼窪左馬
張守繁政と呼び　天正十九年正月

八日歿し、寿光院秋月斉祝居士と号し今の文平迄十代当村に住し　名主の役を奉り　かれが家より分れし民五軒ありと云のみにて家系を伝へざれば其家の事実詳ならず　されど當国七党の内野尻党の譜に鬼窪六郎定綱と云人を載す　東鑑　正嘉二年三月一日の條に　鬼窪又太郎と云人を載せ　又笠原村に載たる嚴暦三年の文書にも鬼窪氏見えたり文平はこれ等の子孫なりや　この外高麗郡新堀村聖天院にある應仁二年鶴口に　久伊豆御宝前鶴口願主衛門五郎武州豊西郡鬼窪郷佐邦賀谷村とあり　則今南藤實ヶ谷村のことにて　其村に久伊豆もあり　又白岡村八幡宮八幡宮とある類　此の辺古は鬼窪と唱ちるゝ事しらる　されば　鬼窪は当所の在名をもて名乗しことならんには　舊き家なること知べし

◎實ヶ谷村

實ヶ谷村は江戸より十二里　郷庄の唱檢地の年代は武蔵郡新西庄に屈し　寛永七年検地也　民戸三十七　東は鶴泉村に界ひ　西は黒浜村　南は江ヶ崎村北は小久兵村なり　東西十三町　南北九町余　用水は黒沼用水なり　当村も郷領分なりしが　後上りて鷹林殿の御領知となり　宝暦年中米津播磨守に賜はり　寛政年中故有て御料となり後文化年中今の如く横田芳右衛門　渡辺拾次郎の二人に替地として賜はれり　此村の民の方に当村及び千駄郎、小久兵三村入会持添の新田あり　享保十七年八木清五郎検地して同人支配所となり　明和年中松平大和守に賜りしより今もしかり

小名　東　南

◎久伊豆社　観音の像を彫りたる円径一尺余の鏡ありしが　二十年以前失ひしと云ふ　本地佛なるべし　正徳四年再建標札の裏に当社は　嘉吉元年辛酉草創とあれど　社伝は詳ならず　されど高麗郡新堀村聖天院に藏する鶴口の表に久伊豆御宝前云々　武州豊西郡鬼窪郷佐邦賀谷裏に　大江滋江満五郎應仁二年十一月九日　あり　鬼窪の名は今伝へざれども佐邦賀谷といい　且久伊豆といへば当社のものなるべくして蓋きより の観請しるべし　聖天院に藏する所以は知らず

末社　稲荷　天王　疱瘡

秋葉　別当延命院　新義真言宗　岩槻弥勒寺の末　神光山と号す　本尊千一面観音　当寺近き頃　回禄にあい寺伝を失へり

天神社　村民の持

諏訪社　村民の持

◎東光院　当山派修験　勢州世義寺の末　葛飾郡上高野村　薩院の配下　当国は天文年中起立とのみ伝へり　開祖法印薬王は慶長十四年二月廿八日寂ぜり　本尊不動を安ず　剣一振を蔵す銘は貞家の文字に似たり　表裏共に梵字四字あり

弁大天社　八幡社　庵塚　東光寺の葬地にして東光塚とも又念仏塚とも云

舊臣家者太兵衛　野口を氏とす　古隣村江ヶ崎村に住し　後当所に移りにしと云　小田原北條氏より與へし文書一通を蔵せりしが二十年前焼失せるよし、其文村民の伝へには　武蔵国川口奉行地たるべきものなりとありて　武蔵国埼玉郡江ヶ崎村野口彦五郎殿と記し虎の印ありしものなりと云

◎城村　城村は江戸より十里　箕輪郷騎西庄に属して東南の二方は黒浜村に接はり　西は元荒川を隔て下国戸村　北は新宿村なり　東西へ二町余　南北二十町余　天水の地なり　ここも岩槻城附の村にて　享保の頃　米津梅千之助に賜はりしより今も子孫梅千助知行せり　検地前に同じ

高札場　村の西にあり

小名◎丸城　一に城と云　西方沼田なり　古へは城ありし処なるべし　されど何人の居りし事を伝へず　此辺に広さ八反程の所水深き沼あり

白山屋敷　城に対しての名なるべし

山通り　三道島

元荒川　村の西を流る　川幅二十間余もしくは三十間余の所もあり　此川の流村内にて二派となり　枝流を古川と云　其の流再び村内

にて本流に合せり　後二流の間の中嶋を三道島と云ふ名の條に出せり

磯川　村内の悪水なり当村と新宿村の境にて元荒川に合せり

久伊豆社　城観寺の持　当村及び新宿村の鎮守なり、

末社　稲荷、第六天社　同持

城観寺　新義真言宗　足立郡倉田村明星院の末　東光山と号す　本尊　阿弥陀

阿弥陀堂　同寺の持、

⑩江ケ崎村　耐持添新田

江ケ崎村は江戸より行程十里　郡庄の唱及検地前村に同じ　民戸七十七　東は座空村に界ひ　西南の二方は黒潴村　北は貫ケ谷村なり　東西十三町餘南北二十五町　ここも古は岩槻領地にして後御料所となり　明和七年　松平大和守に賜はり　今も同じ領分なり　又村の東に新田あり　この外新田の地は享保十二年十二月池田喜八郎紀せり、　日川新田と云　宝暦十一年岡泉村の民半蔵といへるもの開発して　則岡泉庄屋及當村の持添とす、　宝暦十一年石谷備後守　小野日向守　一色安芸守紀して御料の地となれり

高札場　村の中程にあり

小名の塩ノ内　土居及塩の跡のこれりと伝へり

折戸　西

久伊豆社　村の鎮守にて祭神は大己貴命　勧請は嘉吉年中なりと云

別當　南覺院　本山派修験　平手小瀧村不動院の配下　九雲山と号す　開山類矢永禄六年起立す　本尊不動

山王社　南覚院持　稲荷社　八幡社、

天神社　愛宕社　妙見社　以上五社村民の持

保福寺　禪宗曹洞派　上州館林善長寺の末　洞谷山と稱す　南山章山周文天文二年示寂　本尊正觀音を安ず

鐘撞　鐘は宝暦年中の銘を彫れり　不動堂　村民の持

褒善者長兵衛弁事せるん　長兵衛が父を彦四郎といへり　夫迄のもの父に仕へて　孝心を盡せしかば　寛政二年領主松平大和守より　褒美を與へし由　考錄にも見ゆ　彦四郎は　寛政十年六月死し　長兵衛は文化五年に死す

⑩　黒濱村　附持添新田

黒浜村は江戸より行程十里餘　鄉庄の唱前村に同じ東は長崎　江ヶ崎　實ヶ谷村の三村　南は笹山村　西は元荒川を隔てゝ上蓮田村北も同じ川を境として川島村なり　東西十町　南北三十三町餘　民家百六十　夏も岩槻城附の村にて、領主の　栗橋前村に同じく　こゝも大岡氏の領分なり　檢地は元禄十三年小笠原佐渡守紀せり　此餘村の南に新田あり是はもと騎西領村々の悪水落しの河なりしを宝暦十一年開発して新川新田と呼び同十三年　大岡十三郎　服部傳右工門檢地して御料所に屈せり

高札場　村の中程にあり

小名　馬場　南　荒井　平方宿　中野

堀ノ内

林　村の東より北にわたりてあり　松樹多し

元荒川　村の西より巡の方に流るる川幅三十間或は三十四間に至れり　こゝに土橋を架して川島村の方へ往来す　川に添て水除堤あり　高二三尺より一丈許の所あり　又此川に堀あり

沼二ヶ所　一は村の東にあり　反別二十町許　上沼と呼り　一は下沼と云　これは長崎笹山二村の地へも係りし沼にて広さ等のことは

前村の條に載た

久伊豆社　宝蔵院持　末社　稲荷社　天神社
下同じ

神明社二　一は同寺持
一は村民持

稲荷社　村民持

辨財天社　真浄寺持

真浄寺　禪宗洞宗派　上野国邑楽郡當郷村善長寺末
法蓮山と當寺は永正八年の草創にて　開山は本寺二世の僧章山周文なり　元亀三年九月三日寂す、南巷は上野国館林城主赤井山城守家堅が弟赤井但馬守家範なり　永禄十年八月朔日卒す　法名法蓮院月窓南院居士と云　按ずるに或書に　館林城主赤井氏は永享の乱に　結城方に與せし舞木駿河守が一族　赤井若狭守が子孫なり　比若狭守が曾孫を山城守勝光と云　天文二十年（或は大永三年とも云）卒す　其の子但馬守昭虎は　後入道して法蓮と号し弘治二年館林城を築きて居住し　永禄二年十月卒せりと云　此の説によれば　但馬守は　山城守の子にして　館林城を始めて築きし人なれば　寺伝に山城守をもて館林の城主と云ことは誤なり　其除其名

卒年等の齟齬せしことは何れが是なるを知らず
本尊は釋迦にて其脇籠りに長四寸八分の同じ像あり　ここは天文の頃僧所の沼中より出現せしと云傳へり　太田氏より出せし制札一通を藏す　その文左の如し

制札

一、安居中聽聚の衆　喧嘩口論堅法度之事
一、寺内竹木假にも不可伐取事
右二ヶ條　違犯之者有之　可有披露　可処罰科者也、
仍如件
戊子九月十七日　圓阿彌奉之
真浄寺

鐘樓　鐘は元禄十年の銘文あり　寮

薬師寺　新義真言宗　戸ヶ崎村吉祥院末
東光山と号す

本尊　薬師　地蔵堂

観音寺　本山永修験　高郡郡華手不動院配下　元盛山と号　開山隆意享禄四年十二月二十七日寂す　此の隆意は上總国に住せし真理谷三阿守信重が子孫、勝頼母介常秋が子にて　信濃中常勝と云、後修験となりて當所に住せし由所蔵の系図に見えたり

阿弥陀堂　宝蔵院及び江ヶ崎村保福寺の持なり

孝養者友八　養母に事へ孝行の聞えありしかば　寛政二年領主より　青銅若干をあたえて稱美せり

孝養者與一右衛門　天明年中饑饉の時　財を散して貧窮のものを救ひしかば　領主より貨物を賞へて賞せりと云

◎篠津村

篠津村は江所より行程前村に同じ民所百六十七　東は高岩、赤塚の二村　南は白岡及元荒川を隔てて根金新田　西は下大崎村　西よりは樋口村　北は樋口野牛村なり東西十五町餘南北は十四町餘　用水は黒沼用水を引けり、ここも古へ松平伊豆守領分　後御料所となり　元禄の頃は瀧野十右衛門知行し、後徳永小繕に賜はりしより　子孫今の小脇に至れり　検地は前村と同く正保四年紀せり

高札場　村の西北にあり

小名　恩丸　志べ　横宿

天者　神山　中妻　やたり　西谷　東谷

神谷　榎戸　丸部　石道　弟野　中須

天沼　立野　竹花　赤池　餓鬼塚

元荒川　村の南を流る　川幅十五間餘　川に傍て水除の堤あり

星川　村の北を流る　下大崎村より入る、村内にて元荒川に合せり　幅十二間程　夏も川に傍て水除の堤あり　此の川に長さ十二間程の土橋を架す　道中橋と唱へり　此の外村内栢間落堰広さ二堰とまふあり

稲荷橋には土橋を架す　高谷橋と唱へり

久伊豆社　村同の鎮守にして　眞福寺の持
以下同じ

雷電社　神天社　青雲寺の持
下同じ

八幡社　諏訪社　愛宕九ヶ所

明神合社　九ヶ所の祭神は
詳かならず

妙見社　富士浅間社　青雲眞福
両寺の持

稲荷社　村民の持

青雲寺　眞義眞言宗　戸ヶ崎村吉祥院の末　瑠璃
山醫王院と号す　世代の内慶安明暦三年四
月四日寂すとのみ傳へ　この以前のことを傳へず
本尊不動

薬師堂　薬師は丈二尺餘
行基の作

大子堂　門前に
あり　鐘撞　京保鉢
造す

眞福寺　同末　竹林山地蔵院と号す　爰も世代の
内慶安　元禄二年正月二十二日示寂と云
い　以前の事は伝へず　本尊大日を祭ず

西光院　当寺も同末なり　甘露山と号す　僧俊隆
元禄十四年九月十日と云のみにて、此よ
り前の事は伝へず　本尊阿彌陀を祭ず

天王社　普門院　本山派修験高飾郡宇千不動院の
を祭す　配下　明王山と号す　本尊不動

福寿院　当山修験　醍醐三寶院
本尊不動

阿彌陀堂　念佛堂とも云　高
岩村忠恩寺持
一は青雲寺の持
二は眞福寺の持

観音堂二

㊐ 野牛村（やぎゅう）

野牛村は江戸より行程前村に同じ　民戸九十六
東は太田袋　高倉の二村　南は篠津　樋口の二村
西は下早見村　北は青柳村　東西八町　南北三町
用水は見沼代用水の二流を引来れり　爰も古は松平
伊豆守の領分なりしが　元禄七年御料所となり　宝
永六年新井築後守に　賜はり　今子孫内藏介知行也
り　検地は前村に同じ
高札場　村の艮の方
にあり

小名　関口　道下　北谷　外舞臺　北内谷
馬立　南内谷　野きは　藤井　中しま　寺前
奥　駒形　相ノ谷戸　志部　蓮河原
横しま　中ノ宮

久伊豆社　村の鎮守なり観
福寺の持下同じ
末社　天神　稲荷社　駒形社

観福寺　新義真言宗　戸ケ崎村真拝院の末、大悲
山與楽院と号す　第五世良栄寛永十八年
八月七日示寂とのみ伝へ　これより前の事伝へず
本尊十一面観音　生像一尺餘　行基の作　又不動
を按ず　弘法大師の作にて　立像　丈餘に一寸
餘
鐘楼　鐘は元禄十四
年の銘あり
不動堂
阿彌陀堂　前寺の
持